

---

# **街の仕事屋さん +いろいろ。**

三味線乃介

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

街の仕事屋さん+いろいろ。

### 【Zコード】

Z2306BA

### 【作者名】

三味線乃介

### 【あらすじ】

古風な街の仕事人と、愉快な仲間たちの物語。

## 000 除靈がしたかったんです

ぼろぼろに崩れた赤煉瓦と、色あせた茶色の屋根を持つ館。

体育館ほどの大きさが、不気味さをより一層引き立てる。

かつて英國貴族でも住んでいたと言わなければ、嘘にはならない。けれども、そんな栄華は一片も残っていなかつた。

「おいおい、こんなところで仕事をするのかい？ 御免だね」

俺はわざと冷ややかに言つた。仕事がしたくない訳では無かつた

が。

「まあそこを頼みますよ、夜上さん<sup>やかみ</sup>」

神父の服を着た男は、甘つたるい口調で答えた。話し方がムカつく。

大体なんで聖職者たる者が除靈もできないんですか、と言おうとしたが、その必要は無かつた。

「あの靈、ちょっと強いんだよ。ね、お金はいくらでも出すからね」

聖職者になつても金か、腐つてるぜ。

だが仕事が無くなつては困る。

「……分かつたよ」

俺はしぶしぶ了承したように言つた。

「ありがとう！ ジャ、健闘を祈るよ」

腐れ聖職者は何かを隠すように、走つて、どこかへ言つてしまつた。

おいおい、お札も持たないで大丈夫なのかよ？ 大体、除靈つて

いつても何すりやいいんだよ？

疑問はもう解消できなかつた。あいつ、逃げ足だけは速いな。

俺は舌打ちしてから、館と呼ぶにはあまりにも情けない廃墟に、足を踏み入れた。

俺は、夜上リュウヤ。

某国際都市の片隅で仕事人をしている。

仕事人といつても、人殺しをしている訳ではなく、犬の散歩をしたり、解体屋の手伝いをしたりしている。街の便利屋と言つたところだろうな。

除霊は何度もしたことがある。ただ、お札も持たず、除霊の手順もうろ覚えなのはこれが初めてだ。

懐中電灯だけで除霊ができるなら、観光客でもできるじゃないか。それを俺に頼むほどの理由があるのか？

まあいや、この不景気にいい仕事が来たもんだぜ。

それにして不気味だ。西洋人はこんなものに神秘を感じるのか？ 今も昔も埃だらけだつたんだろうな。

廊下も無駄に長い。そのうえ赤絨毯が敷いてあるが、高貴な気分にはならない。

何も出なかつたらそれはそれで問題だがな。

聖職者が幽霊を何かと見間違えたんだつたら、もう笑い話だ。ははは、と大きな声で笑つてみた。

声が廊下中にこだまするだけで、返事は無い。

さつきからドアを開けたり閉めたりの単純作業が続いている。飽きてきたが、ただで帰るわけにはいかない。

……そうだ。

出でこないなら呼び出せばいいじゃないか。

俺は木製のドアを開けて、部屋に入った。  
召使いの部屋だろうか。いつかの高貴な館にしては、随分と小さな部屋だ。

埃を被つた本棚には、年季のある本が揃つている。

その中に申し訳なさそうに置かれた、黒いインクの入った瓶。テーブルの上には、先端が黒ずんだ羽ペンが寂しそうに置かれていた。

椅子に座つて、ペンを握つてゐる。なんとかなりそうだな。  
次いで本棚から縁表紙の本を取り出した。

それから適当なページを開いて、破り取つた。にじみそうだな。  
最後に、インクを取つて、瓶の蓋を開けた。勢い余つて少しこぼしてしまつた。

ペンの先をインクに浸した。そして、一気にアルファベットを書き上げた。

日本人に語つた「じゅくりさん」をやる時が来たよつた。まさかこんな所でやるとは思つてもいなかつたが。

硬貨は……無いな。ペンでもいいだらうか？

ペンの先を鳥居としらシンボルの上に乗せて、静かに書つた。

「じゅくりさん、じゅくりさん、どうぞおいでください。もしもいになられましたら『はこ』へお進みください」

反応しない。もう一度、書つた。

「じゅくりさん、じゅくりさん……」

そこまで言いいかけたといふ、いきなりペンが動き出し、「はこ」へ向かつて動き出した。

驚いた。マジでなるのかよ。

しかし驚いてばかりもいられないので、次の質問に進むことにした。

た。

「鳥居にお戻りください」と書つて、ペンはゆくべつと鳥居に向かつて動き、止まつた。

「じゅくりさん、じゅくりさん、この館で怪奇現象が起つていることを『存知ですか』

ゆくべつと「は」。女性の声が聞こえた。

思わずペンを投げ捨て、声がしたほうを向いた。

じゅくりさんの途中で持つてゐるもの放してはいけないそりだが、関係ない。

そこに居たのは、真つ白な女性の幽霊だつたから。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2306ba/>

---

街の仕事屋さん +いろいろ。

2012年1月5日21時46分発行